

---

# 闇からの咆哮

針井 龍郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇からの咆哮

### 【Nコード】

N1768I

### 【作者名】

針井 龍郎

### 【あらすじ】

度重なる科学技術の乱用。神の領域をも冒す遺伝子操作、その結末は悲惨なものだった。絶望の淵で人々の心は荒み、世界中に悪が満ち、巷には犯罪が溢れかえる。滅亡へと突き進む人類、果たしてそれは天命か 真の光を知らぬ男の前に、突如現れたひとりの少女。数奇な運命を背負う彼女と出会い、そして男は、世界に挑む……

## 01 (前書き)

この作品は、『空想科学祭2009』 出展作品です。

このような機会を設けていただいた天崎剣さまに、この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。

人間は誰であれ、心のどこかに闇を抱えている。そしてそれは、常に人間の心を支配しようともくろんでいる。

いかにあがこうが、その闇から逃れるすべを、人間が持つことはできない。なぜなら、心に闇を住まわせる生き物こそが、人間というものであるからだ。

妬み、憎しみ、恨み、蔑み……。あらゆる負の感情に惑わされ、いとも簡単に光を見失う。後に残るのは闇そのもの。それこそが、人間というものであるのだ。

そんな事を言っていたのは、一体どこの誰であったか。思い出しただところで一銭の価値もない。だがしかし、その答え自体はなんとも見事到的を射ていることが。どれほど端的に、人間というものを表せていることが。

結局、人間という存在であり続ける以上、心の闇から解放されることは決していないのだ。悪人なら言うまでもなく、たとえ善人であっても無意識に、あるいは一時の気の迷いによって悪を為す。それを闇と言わずして何と言おうか。

つまるところ、この世に本当の意味での正義というものはないのだろう。この世に掲げられた正義は、どれをとっても一個人の勝手気ままな欲望を押し込めただけの、ただの偽善。いや、偽善とさえ言えるかどうかは分からない。すべての行動に裏があるなら、それは闇と同義なのだから。

ならば、この世は闇で満ち溢れた地獄絵図。餓鬼共がのさばる、暗黒街。そんな場所で生きる自分も、所詮はそのうちの一人にすぎないのだろうか。

幾度となく繰り返した、答えの出ない堂々巡りのような思考から抜け出し、コウキは閉じていたまぶたをゆっくりと開けた。その眼

球に、街中に灯された光のきらめきが映る。超高層ビルの屋上から眺めるその光景は、神秘的で美しく、それでいておそろしくもあった。LEDの冷たい光のまたたく、市中の繁華街。それを反射してぼんやりと輝く雑林のようなビルの群れ。一見華やかで観る者全て目を奪うが、しかしそれらは生命を持たぬ機械の灯。そんなもので満たされた街に生きているのかと思うと、それだけで薄ら寒さを感じる。自分自身までもが、無機質な機構の内部に組み込まれているような、そんな思いが頭によぎるのだった。

『マスター、そろそろ時間ですよ』

若い女性の声がコウキの意識を現実に戻した。丁寧な口調ではあるが、茶目つ気が感じられる弾むような声。ゆっくりと立ち上がり、コウキは左耳に装着したイヤホンを手で抑える。黒いロングコートが、ビル風をはらみ、音を立ててたなびいた。

『準備の方は、よろしいですか？』

「まあまあだ。良からうが悪からうが、どっちにしろ、なるようにしかならんだろうさ」

イヤホンから伸びたマイクに向かって、コウキは軽口でもたたくかのように返答した。普段となんら変わらぬ、人を食ったような口調。いや、もしかすると今の方がその傾向はより強くなっているかもしれない。その原因は、緊張をまぎらすためか、高ぶった神経を抑え込むためか……。

「それよりもコニカ、ターゲット標的の詳細の再確認をたのむ」

『了解です』

しばらくの沈黙。

ややあって、コニカと呼ばれた女性の声が、淡々と目的の人物データを読み上げていく。

『トウマ・アラキ、国籍は日本。身長百七十五センチメートル前後で、筋肉質な体格の男性。爆発物専門の仲買人<sup>ブローカー</sup>です。自身も爆発物の扱いに長けています。国際指名手配を受けており、賞金は生存している場合は十萬ドル、死亡していた場合は百ドルとなります』

「要は、爆弾に気をつけて生け捕りにしろって話だな」

『……確かにその通りですが』

コウキの要約の適當さに、コニカは呆れたように溜息をついた。だが、こういった事は日常茶飯事なのか、それ以上はあえて突っ込まない。

『マスター』

ふと、コニカの声の調子が変わった。幼さを少しばかり残した、明るい女性の印象がさっぱりと消え去り、冷徹に作業を遂行する、機械のような響きを感じ取れる。

『消灯まで、およそ一分です。十秒前からカウント始めます』

「……いよいよか」

ぼそりと呟いて、コウキは腰のあたりに手をやる。そこにはいつも通りに、重量感のある回転式拳銃リボルバーがホルスターに収まって、ベルトにぶら下がっていた。独特の形状をしたグリップを握り込み、トリガーに人差し指をかける。実際に発射するつもりはないが、そうしている事が、彼の集中力を高めていくのだ。

『十秒前。九、……八、……七、……』

静かに秒読みが始まる。コウキのまとう気配が、刀の切っ先のような鋭さを帯びて、じりじりと凝縮してゆく。

『……三、……二、……一、……』

イヤホンから聞こえる『零』ゼロのカウント。それとともに、煌びやかに輝いていた街の光が、一つ残らず消え去った。まるでバケツ一杯の墨汁をひっくり返してしまったかのように、あたりは一面、漆黒の闇に包まれた。

それに合わせて、コウキの視界が可視光を感知するものから、赤外線暗視装置によるものへと切り替わる。

予期せぬ停電、などではない。むしろ、これは意図された事なのである。

エネルギー資源の枯渇、それにより人類は、否が応でも自然由来の循環エネルギーの一部を利用するしかエネルギーを得る方法がな

くなつてしまった。すなわち、太陽光発電、風力発電、地熱発電など……。だがしかし、そのようなエネルギー源で、需要のすべてをまかなえるはずもない。必然的に、国、いや世界をあげてのエネルギー節約に乗り出すほかなくなつたのである。

結論を言うのであれば、三十年前から夜間の電力使用が全面的に禁止され、午後九時から午前六時までの間、電気の供給がストップするようになってしまった。例外は病院などの、一部の認められた機関のみだ。

そして、闇に包まれた街は、瞬時に姿を変える。表から裏へと、世界は変わる。

地下社会の住民たちは目を覚まし、無法者どもが己の持つ牙をとく。

力がないと生きてはゆけない、そんな弱肉強食の世界。生と死が背中合わせに存在する、そんな極限の世界。日中は平穏な街並みも、凶悪な獣がうごめくコンクリート・ジャングルへと、変貌を遂げるのであった。

「暗視装置の起動を確認、視界良好。コニカ、いつでも行けるぞ」「分かりました。では、予定通りプランAをお願いします。まずは十分以内にポイントD-02まで移動して下さい」

「あいよ」

言うが早いか、コウキはすぐさま駆け出し、高層ビルの屋上からその身を踊らせた。建物の側面を吹き上がる生暖かい風にあおられながらも、隣のビルの屋上に難なく着地する。

そして軽やかな体重移動とともに、速やかにトップスピードにまで達し、コウキは夜の闇を、猫のような身軽さで走り抜ける。

伸び放題の黒いざんばら髪が、コウキの跳躍にしたがつて後方になびく。わずかな月明かりの下、コウキの表情がぼんやりと浮かび上がった。極度に感覚を研ぎ澄ませたその顔の内、金色の双眸が異様な程の輝きを放っていた。

何の変哲もないとあるビルで、コウキはおもむろに足を止めた。報告では、確かこのビルは廃ビル同然で、ここ数ヶ月間無人なのだから。ひとまずマイクに向かって手短かに報告する。

「コニカ、たった今目的ポイントまで到達した。突入のタイミングはそちらにまかせる。指示があるまで、待機しておく」

その声は、かなりの距離を全力疾走していたにもかかわらず、まったくもって普段通りで、息切れ一つしていなかった。いや、もしかするとコウキにとっては、先ほどの事はなんら問題のないレベルの運動でしかなかったのかも知れない。だとすれば、彼の身体能力はいかほどのものか。それはもはや、普通の人間の領域を超えているのではないのだろうか。

『さすがですね』

コウキの連絡を受けて、無線機越しにコニカが呟いた。

『ポイントD-02到達まで七分四十二秒。予定時間をはるかに上回っています。心拍数、呼吸数も安定。ベストコンディションのようですね』

身体状態を淡々と述べる。賞賛の言葉を口にはしているものの、予定よりも時間を短縮できるのは別段めずらしい事でもないのだろう。いや、時間を多めに設定しているのは、コニカ自身のためなのではないか。それならば不思議はない、あくまで事務的に話を進めていく。

『では、しばらくの間はそのようにお問い合わせいたします。こちらもうすぐ目的ポイントに到達できる予定です』

「了解、じゃまた後で」

通信がぶつりと切れた。コウキは夜の静寂に包まれていく。自分の呼吸の音が、いやに耳障りだ。

闇市の辺りならばともかく、ここは特別管理区域の一角。本来ならば、夜の住人は決して入り込めないような場所。“消灯”後に無音状態になるのも道理である。

ましてや、地下社会の住人は人一倍静けさを好む。たとえ侵入したとしても、それが街の静けさを破ることにはつながらない。

そう、例をあげるならば、丁度今のような状況だ。

音を立てるということは、自分の居場所を相手にばらしているのと同義である。ただでさえ、最近では聴覚デバイスのインプラントにより、裏の連中は耳ざとい者が多くなっている。わずかな物音でも致命的ミスにつながる。もつとも、屋上にいるコウキの音に、ピルの内部にいる者が気づくのは、さすがに不可能ではあるが。

コウキは腰にぶら下げていたホルスターからリボルバーを抜き出し、装填されている弾薬数をチェックした。弾層振出式スライクアウトの構造により、銃身の横に露出したレンコン状のシリンダーには、その穴の数通りの・357マグナム弾が七つ、きれいに並んでいる。確認が終わり、手首のスナップのみでシリンダーを元の位置にはめ込んだ。軽い金属音が響く。

非反射処理のほどこされた、黒い回転式拳銃。かなり大型に設計されたそのオリジナルモデルは、持ち主の性格を反映しているのか、念入りに手入れされていた。まさに小型のカノン砲と見まがう程の角張った太い銃身は、歴戦のキズやへコミはあるものの、くすみなどは見当たらず、日頃からよく磨かれているであろうことが安易に想像できた。

コウキはリボルバーを胸元に抱き、屋内への階段に通じる扉にゆっくり近づいていく。そして振り返り、扉の横の壁に背をあずけた。そのままの体勢からぴくりとも動かない。

それでも決して集中力は揺るがない。コウキの持つ、桁外れの精神力のたまものである。時間だけが、ゆっくりと過ぎてゆく……。

『 行きます！ 』

突然、前触れもなしにコニカが合図を出した。不意打ちだとか、そんなレベルの話ではない。だが、それでもコウキは恐るべき反応を示す。ほとんどタイムラグなしに、扉をけりやぶるように屋内へ飛び込んでいく。そのままの勢いで、コウキは階段を一息に駆け下りた。

両足がフロアにつくと同時に、リボルバーを体の前に構え、待ち

伏せを警戒する。しかし、エレベーターに通じる真つ暗な廊下には、人っ子一人見当たらなかった。念のために、暗視装置からサーモグラフィーへと視界を変更して視認するが、やはり人間と思しき生体反応は見られない。

それだけの事を一瞬でやってのけ、コウキは光のない通路を風のように駆ける。

『マスター、その通路の突き当たりにエレベーターがあります』

「あいあいさ」

マイクに向かって呟く。もっとも、エレベーターがあったからといって、それに乗るような野暮なマネはしない。

コウキは走っている勢いそのままに、エレベーターの扉の間に向かって左手を突き出した。鈍い音を立てて扉がひしゃげ、わずかながら隙間ができる。コウキはそこに両手を差し込むと、力任せに押し開いた。そのむこうには、深い穴がぽっかりと口をあけている。吹き上げてくるほこりっぽい風が、コウキの髪をなびかせた。

『現在地は五十階、目標は三十六階です。フロアには目標以外に六人の生体反応があります。突入時にご注意を』

「あいよ」

コウキは右手に持った銃をホルスターにおさめ、跳躍して左手でエレベーターのワイヤーをつかむ。そのまま穴の中に吸い込まれるように、エレベーターの中を下っていった。

数秒後、ワイヤーを握った左手でブレーキをかけ、ゆっくりと止まった。だがしかし、コウキが通り過ぎた十階分、つまり現在のフロアは四十階。目的のフロアにはまだ足りないが、それにはもちろん、理由がある。

コウキは懐から小型の機械を取り出し、そこからのびているコードを持って、階下へとぶら下げた。吹き上げてくる風にあおられ、コードがゆらゆらと揺れる。ただの白い箱のようなソレは、ちょうど四階分だけ下ったところで止まった。

「作戦第二段階、用意はいいか？」

『了解、いつでもどうぞ』

間髪入れずに返ってくるコニカの応答。

コウキは手に持ったリモコンのボタンを押した。

瞬間、視界を塗りつぶす、目もくらまんばかりの閃光。

腹の底に響く、凄まじい轟音。

左手だけで支えた体が、爆風で左右に激しく揺れ、ワイヤーから振り落とされそうになる。だが、コウキは顔色一つ変えることなく、静かに階下を見下ろす。

「どうした、何があつた！」

「分からない、いきなり扉が吹き飛ばされて」

「騒ぐな、馬鹿者ども！ 次が来るぞ、警戒を怠るな！」

見張り番らしき男たちの怒鳴り声。

派手な爆発の割にはあまり威力がない、というのがこの爆弾の欠点だが、エレベーターホールの扉を吹き飛ばすには十分だったようだ。

コウキは閃光弾を取り出し、口で安全ピンを抜いて爆破されたフロアに投げ入れた。すぐさま強烈な光が閃き、まぶたごしでさえ近くににいる者の目を焼く。

その瞬間を逃さず、コウキは体を大きく振って、爆煙に紛れ込んで飛び下りた。目的の階に転がり込みつつ銃を抜き、白い粉塵舞い散る中を、極力音を立てずに移動する。

視界を暗視装置からサーモグラフィーに変更する。赤外線も、この煙の中ではまるつきり役に立たないのだ。

煙に紛れ、ぼんやりと視野に浮かび上がる熱源反応が四つ。ゆっくりと体を起こしこちらを振り返る。

「くそつ、ばやばやするな、撃て！ 侵入者だ、逃すな！」

柄の悪いがなり声、同時に断続的な銃声が響き渡る。暗闇の中でマズルフラッシュ発射炎が幾度となくきらめき、そこここを鉛玉が飛び交う。向こう

はどうやらマシンガンを所持しているようだ。

とっさの判断でうまく柱の陰に隠れることができたコウキではあったが、現状のままではいずれ命を落とすだろう。機会をうかがっている今でさえ、凶悪な音と共に弾丸はコンクリートの柱を打ち砕く。貫通してしまうのも時間の問題か。

万事休す、とも思える状況だが、しかしコウキはまだまだ余裕の表情を保っている。この程度であれば十分予想の範囲内、まだまだ手は残っているのだから。

まず第一の手段。最初の切り札。

轟音鳴り響く激しい弾幕の中を、小柄な人影が一つ、するりと走り抜ける。そして次の瞬間、四人分の悲鳴が上がった。

「クリア」

銃声の鳴り止んだ通路の真ん中に立つ、一人の女性。淡い緑色のロングヘアが、勢い余ってふわりと宙に舞う。

「コニカ、ダメージは？」

辺りの様子を窺いながら、柱の陰から姿を現すコウキに、

「ありません、マスター」

突然現れた女性、もといコニカは、淡々とした口調で返す。

彼女の周りには、白目をむいた男が四人、泡を吹いてひっくり返っていた。出血もなく、一見して無傷のようだが、よく見ると全員の体のどこかに、鋭い針のようなものが刺さっている。それは鋼のワイヤーで、コニカの手首に文字通り繋がっていた。

いや、正しくは『コニカの手首から射出されたワイヤーの先に、鋭い針が装着されている』と、そういうことであろう。肌色の皮膚を突き破つてのぞく、生身の体ではありえない金属製の機構。戦闘用の特殊インプラントか、はたまた……。

彼女はワイヤーを手首から切り離し、コウキとともに通路の奥へ向かって駆け出した。

「電圧は五十ボルト前後に設定しました。おそらく、あと数時間は気を失ったままでしょう。もっとも、意識が戻ったとしてもしばらくは動けないでしょうがね」

「残弾数は？」

「階下で五発、今ので四発。全部で九発撃ちましたから、後三発残っています」

「よし、それだけあれば十分」

「マスター、止まってください」

コウキの言葉を遮る形で突然、コニカが制止を呼び掛けた。壁の一点を注視している。

「センサー型の爆弾です。おそらく、追手から逃れるために設置したものと」

「分かった、少し下がっている」

コニカを自分より後ろに下からせ、腰のホルスターから拳銃を引き抜く。暗視装置の感度を最大まで上げ、コニカの指す一点に狙いを定めた。

放たれた弾丸は、目指す目標を寸分たがわず打ち抜く。

瞬間、世界から音が消えた。

そう感じたのは、あまりの轟音に聴覚がおかしくなったからだだろうか？ 荒々しく吹きすさぶ爆風とともに、肌に熱を感じる。網膜が光で焼き付き、視覚までもが奪われないこの状況下において、それでもコウキは普段の平静さを失わないでいた。

「さあ、行くぞ」

障害の排除された通路を、二人は再び走り出す。闇に包まれた中を、滑るように音もなく。

通路を突き当たり、左右を見回す。そこでようやく、彼らは屋外への脱出をはかろうとする二人の人影を認めた。

「その場で止まれ！ さもなくば、強制的に確保する！」

声高に叫ぶが、相手はちらりと振り返っただけで、微塵も止まる気配などない。もっとも、コウキとしても、こんなに簡単に済む仕事とは思っていない。

振り返った時に見えた顔は、コニカに転送してもらったトウマ・アラキの視覚データと合致する。その小脇に挟まれているアタツシユケースの中身が、今回の取り引きの品だろうか。

だが、その隣を走る巨漢にはまったく情報がなかった。

二メートルを超えんばかりのその男は、その巨体に似合わぬ速度

で、追跡者たちの前に行く。日本人男性としても平均以上の体格を持つトウマが、まるで子供のように見えてしまうのだからお笑いものだ。

どっちにしる、この場合は二人とも確保する必要がある。見た目だけなら、ケースを持つているトウマの方が怪しいが、中身がそこに入っているかは別問題だ。かといって、その裏をかいてトウマが所持しているという可能性もないではない。そもそも彼らの当初の目的からして、トウマ・アラキの確保なのだから。

隠し階段を使って地上に降り立った彼らは、申し合わせていたかのように突然二手に分かれた。戦力を分散させて、そのまま逃げる腹づもりなのだろう。

「コニカ、お前はトウマを追え。俺はあのデカブツをやる」

「イエス、マスター」

短い返事を残して身を翻し、コニカはあつという間に闇の中へと消えた。

情報戦ともなれば無類の強さを誇るコニカではあるが、その反面、想定外の状況や相手に対しては、判断が僅かに鈍るという欠点を持つ。今回の場合では、それが命取りになりかねない。

トウマ相手であれば、コニカの性能は信頼できる。この選択に間違いはないはずだ。後は自分が上手くやれば……。

狭い路地を抜け大通りに出たとき、ふと、コウキは足を止めた。

追っていた男が、おもむろに立ち止まったからだった。

その意図がはつきりせず、思わずコウキは眉をひそめる。

「どうした、今更おとなしく捕まる気にならなかったのか？」

「アキタ……」

「あ？ あきた？」

ぼつりと呟いた男の声を、オウム返しに聞き返すコウキ。

「アキタ……、逃ゲルノ、アキタ。モウ……、ヤツテモイイヨネ……

……？」

コウキの背筋に戦慄が走った。

考えるより先に体が動いた。本能的に右前に飛び出した、その瞬間、男の拳がアスファルトで舗装された道路の真ん中に、でかかと大穴を穿っていた。

息つく暇もない、間一髪の攻防。

「威力はそこそだが、大振りには後が隙だらけだぜ」  
跳躍と同時に引き抜かれた拳銃リボルバーが火をふく。全弾六発を一息で吐き出し、どれもが寸分違わず命中した、ハズだった。

男は傷も負わなければ、倒れることもなく、ただ悠然としてその場に立っていた。

「当タラナカッタ……。ドウシテ？」

「くそ、マジでかよ」

さすがのコウキも、驚くほかない。左腕に三発、左足に三発。関節を狙って確実に撃ち抜いたはずだったのに。

「ちつくしょ、ハズレクジ引いちまったかな？ まったくついてねえ」

歯ぎしりしながら愚痴をこぼす。

おそらく、男は両足と、少なくとも左腕を義肢化しているのだろう。いや、今の拳での一撃を見るに、右手も同じように義肢化しているはずだ。それならば、巨体に似合わぬあの突進力も納得がいく。いや、それだけならばまだいい。最悪なのは……。

「モウ一度……」

再びコウキの元へ、一直線に突っ込んでくる。理屈からいえば、なんとも単純な攻撃。ただしいくら見切りやすいとは言っても、それに自分の体が反応出来なければ……。

「がああっ！」

コウキは叫び声を上げて、路上に倒れ込んだ。完全に避けきれなかった、それでも僅かに拳がかすっただけだ。それなのに。

(肋骨を四、五本、もっていかれたか……?)

背筋をイヤな汗が流れた。

この状況において、長期戦では間違いなくこちらがやられる。相手の拳も、手負いの今では反応すらできないだろう。マグナム弾が通用しないのは、先ほど既に証明済みだ。頭を狙えばそれでも倒せるかもしれないが、それでは相手を間違いなく殺してしまう。

残された道は、短期決着。それしかない。

うつぶせの状態から跳ね起き、脇腹の痛みをこらえながらもコウキはコートの胸ポケットに手をつ突っ込んで、弾頭が赤く塗られた弾丸を取り出した。出来れば使用を控えたかったが、この状況では仕方あるまい。

シリンダーをスイングアウトさせ、弾を装填する。

素早く銃身を男に向け、拳をアスファルトに打ちつけたまま未だ動かぬその体に、ここぞとばかりに撃ち込んだ。

夜の闇に、爆音が轟いた。

着弾と同時に、弾頭に詰め込まれていた火薬に引火したのだ。

いざという時の特殊弾。これならば、さすがにタフなあの男でも、立てないはず。

果たして、白い粉塵の向こう側から、男の倒れる音が聞こえた。

長く息を吐き、コウキは拳銃を構えた右手を、ゆっくりと下ろした。痛む肋骨を左手で抑え、倒れ込んだ男に喘ぎながら近づいてゆく。男の身柄の確保と、取り引きの品を押収する必要がある。

左側面に弾丸を受けた男の体は、いくら鋼鉄製の義肢とはいえ、

見るも無残にぐちゃぐちゃに碎けていた。裂けた部位からはワイヤーが覗き、流れ出た油圧式人工筋肉のオイルは、まるで血のように地面を濡らす。独特の臭気が鼻についた。

それでも、男の生身の部分には、これといった致命傷はなかった。男の体の頑丈さのためか、それとも弾丸の威力さえ計算に入れたうえでのコウキの狙いうちのためか。おそらく、そのどちらもだろう。

『マスター、こちらは只今、身柄の確保を完了しました』

コニカから無線が入った。

「了解。で、ケースの中身は？」

『はい、詳細は分かりませんが、なにかの書類のようです』

結局、取り引きの品はトウマの方が所持していたようだ。

「よし、物品の確認ができれば、内容は今のところどうでもいい。

こちらもついさっき終わったところだ。引き上げるぞ」

『はい、マスター』

「あつと、コニカ。ちょっとだけ待ってくれ」

通信を切ろうとした彼女を、コウキはふと思いとどまり、慌てて呼び止めた。

苦笑いしつつ、コウキは骨折したわき腹を押さえて、

「すまないが事務局に連絡をつけてくれないか。これ以上はさすがに動けないんだ」

かすれた声で用件を伝えると、コウキはすっとその場に腰を落とす、その衝撃に顔を歪めた。

特別管理区域に住む人々の朝は早い。夜になれば電気が使えなくなるので、必然的に夜更かしすることができなくなるからだ。日の出とともに目が覚めてしまうのも、まさに道理というものであろう。技術水準こそは年々確実に上昇しているものの、生活リズムこそは大昔にまでさかのぼってしまった。そう、電球という画期的な発明品が、幕末の文明開化とともに国内に輸入されてくる前にまで。もつとも、その方がよっぽど健康的な生活を送ることができているというのも、皮肉なものだろう。道行く人々の中にも、寝不足気味と見受けられるような者はいない。

しかしながら、この世の中には必ず例外というモノが存在する。そう、この場合であってもその法則は当てはまる。

伸ばし放題の黒髪に無精髭、半分とじられた瞼に隠れた金色の瞳は、心底眠たそうにどんよりとした光を宿している。黒いロングコートをその身にまとい、猫背気味に背中を丸めて歩く姿は、周りの人々とは明らかに異質な存在である。その雰囲気は、たとえ意図せずともぼつかりと独特の空間を形成していた。

一言でいってしまえば、要は『堅気の間人ではない』と、そういうことである。触れれば切れてしまうような、日本刀に似た鋭さを本能的に感じさせてしまうのである。

そしてさらに、彼の後ろについて歩く女性も、ある意味で独特の雰囲気を持っていた。

遺伝子操作のたまものであるのか、天然ではありえない淡い緑色の髪の毛。腰までとどかんばかりのロングヘアは、太陽の光の下でつややかに輝く。ぱつちりとした目、整った鼻梁、みずみずしい唇。その顔に浮かぶ満面の笑みこそが、彼女をより魅力的に飾り付けていた。笑顔は女性の一番の化粧だとは、本当にうまく言ったものだ。

無表情で歩く人々であふれかえる中で、彼女のはつらつとした表情は、生き生きと輝いていた。

二人は超高層のオフィスビルの建ち並ぶメインストリートを外れ、小ぢんまりとした雑居ビル街へと歩を進めていった。しばらくの間はにぎやかな通りが長々と続いていたが、奥へ進むにつれて人の気も次第に少なくなり、何やらいわくありげな看板が、やたらに目につくようになってくる。

この地域はちょうど、特別管理区域の端のあたりに位置している。そのため、政府が裏の仕事として管理している機関などを設置しやすいのである。直接管轄できる範囲内で、さらにいざという時であっても、秘密裏に事を処理しやすい、そんな立地条件を満たす土地といえば、ここ以外にはほとんど見つからないだろう。

例えば、コウキの目的地である賞金稼ぎの管理・登録を行うオフイス群、そういったものもここに集まっているのだ。歩調を変えることなく長々と歩いてきたコウキであったが、とあるビルの前でようやく足を止めた。そのビルは、周りと比べても極めつきの汚さで、元々はきれいだったのである。コンクリートの壁も、今ではどす黒く染まってしまった。あちらこちらにひびが入り、いつ倒壊してもおかしくないような状態である。

コウキはコートのポケットからアイディーカードを取り出し、ビルの入口に設置されたカードリーダーにそれを通した。電子音が鳴り、ロックが解除されたことを伝える。ガラス張りのドアを押し開き、二人はビルの内部へと踏み込んでいった。

曲がりなりにも政府の管轄下にある以上、おんぼろビルといえども最低限のセキュリティは必要なわけで。あらかじめ賞金稼ぎとして個人登録していないと、ビルに足を踏み入れることすらできない仕組みになっているのだ。

入口から入つてすぐ、エレベーターホールの手前に、小窓が設置されている。コウキ達は、まずそちらの方に向かった。

小窓の向こう側は、少しばかりのスペースがあつて、かなりがっしりした体格の男が、扉を開けて入ってきた二人の姿を、じつと観察していた。

コウキは胸の高さにある小窓を覗き込み、先ほど通したアイデューカードを顔の横に掲げて、名を名乗った。

「コウキ・クロサワ。アイデューナンバーはJ09388B。通行許可を頼む」

気難しそうな守衛は、まずコウキの顔を見、そしてコニカに視線を移した。

「そっちの身分は？」

「型式W-52CA、登録ナンバーJ97847B。分類は、戦闘型特殊ガイノイドです」

そう言つてコニカは、左頭部を小窓に近付けた。そこには本来あるべき外耳の代わりに、細長い台形型のアンテナが、側頭部に沿つて斜め上に突き出ていた。ちょうどそこに、型式番号が記載されているのだ。

コニカの番号を確認し、守衛はエレベーターホールの方に向かつて、軽く顎を突き出した。通行許可の合図だ。ずいぶん簡単な審査である。

なぜ武装解除をしないのか、という疑問もあるだろうが、最近では行わないオフィスが増えてきている。その理由として、やってもほとんど意味をなさないという事が第一にあげられる。

だいたい、賞金稼ぎという身分で食つていくには、必然的にある程度の技量が必要になるわけだ。仮にそのレベルの者が本気になつて武器を持ち込もうとした場合、たとえ厳密な審査を行ったとしてもそれを防げるのかは、はなはだ疑問である。それならばいっそのこと、全員が一律に武器を持ち込むようにさせて、お互いに牽制しあうように仕向ける方が、よっぽどマシな対策である。

とにもかくにも、二人は薄暗い電灯のともったエレベーターに乗り込み、四階のボタンを押した。

がたんと一度大きく揺れ、騒がしい音を立てながら上昇するおんぼろエレベーターは、まさにこのビルにふさわしいものに思える。もし、なにも話を聞かされていない状況であれば、いったい何処の誰が、このビルが政府の管轄下にある建物であると判断できるであろうか？

いつ落下し始めてもおかしくない状態ではあったが、それでも一度も止まることなく、二人のエレベーターは目的のフロアに到着した。一呼吸置いて、思い出したかのように扉が両側に開く。

そこには別世界が広がっていた。

まるで、違う建物の中に迷い込んでしまったかのような印象を与えるくらい、きれいに整った空間が、そこにはあったのだ。

くすみ一つない真っ白な壁紙。床にはじゅうたんが敷き詰められ、部屋の隅にはしゃれた観葉植物が、部屋の中に緑という彩りを与えている。

正面には大きなガラス張りの窓が設計され、照明器具を必要としないくらいの光を、外部から取り込むことができる。

そして、その窓の前に鎮座された巨大な木製のデスクに、一人の女性が腰かけて、いましがたやって来たばかりの二人の姿を、にんまりと笑いながら見つめていた。

「おっす、やあっと来たねえ、コウちゃん。あんまり遅いんで、待ちくたびれちゃったよ」

右手を挙げて陽気にあいさつをするこの女性。顔を傾けるのにつられて、頭のとっぺんでまとめられたポニーテールが、ゆらりと揺れる。

そんな彼女こそ、このオフィスの一切を取り仕切っている所長、ルミナ・クロサワなる人物であった。

「いい加減、コウちゃんはやめてほしいんだけど」

ただでさえ不機嫌そうなコウキの表情が、ルミナの言葉を聞くなり、さらに険しくなる。その隣でコニカは、笑いたいような、笑えないような、微妙な表情を浮かべていた。

「いいじゃないか、コウちゃんで。まったく、つれないねエ。師匠に合わせないなんて、ホントにろくでもない弟子だ」

コウキを弄ぶのがさも面白いかのように、ルミナは唇の端を釣り上げる。切れ長の涼しげな眼もとは緩み、紅い瞳はいたずらっぽい光をいっばいにたたえていた。首に巻いた黒革のチョーカーが、彼女の見た目を大人っぽく感じさせているのにも関わらず、その表情は彼女の印象を、限りなく子供じみたそれへと近づけている。大人と子供の相反する要素を併せ持つ女性、それがルミナだった。

「よく言う、自分が一番ろくでもないくせに……」

聞こえないようにぼそりと呟いたコウキだったが、ルミナは素早く反応した。

「　　なんか、文句でもある？」

「いえ、何も」

ギロリと睨みつけられて、コウキはすぐさま発言を取り消した。

あのままでは自分自身が消されかねない。過去の修業時代に刷り込まれたトラウマは、簡単に消えることはないのである。

苦虫をかみつぶしたかのような顔をしているコウキを見て、ルミナは満足げな笑みを浮かべ、座っていたデスクから飛び降りた。

「それで、今日はわざわざ嫌味を言われに来たってわけじゃないんでしょう？　ちゃんと連絡は届いてるよ。トウマ・アラキの捕獲依頼、完了の手続きに来たんでしょ？」

「知ってるんなら、さっさと始めてくれよ」

アイディーカードをかざしながら、せかすようにコウキが言う。

しかしルミナは、カードを受け取らずにコウキに近づいて行って、おもむろに彼のわき腹に手を触れた。

いや、訂正。無言のまま、力の限りひっぱたいた。

「ぐえっ！」

予想外の行動に、コウキは思わず飛び上がった。それも当り前だ、昨夜の戦闘で肋骨を骨折しているのだから。むしろ、今まで顔色一つ変えることなく過ごしていた精神力こそ、称賛に値する。

「マ、マスター！ 大丈夫ですか！？ ルミナさん、マスターは今、肋骨を――！」

「分かってる、分かってるよ。連絡は届いてるって言ったじゃないの、こいつの今の状態も把握してるわよ」

叫ぶコニカに右手を差し出し、口をふさぐように指示しながら、改めてコウキの目の前に移動した。わき腹を抱え込んで呻くコウキの顔を覗き込み、すつと表情を引き締める。

「全部聞いたさ、また無茶苦茶やったんだって？」

「……………」

真剣な表情で問いかけるルミナに、コウキはまともに視線を合わせられない。今回はうまく捕らえることができたが、一歩間違えば命を落としていたであろうことは自覚していたからだ。命を博打に賭けることが一流の賞金稼ぎではないと、常々ルミナに言われ続けていたからだ。

「つたく、このバカ弟子は分かっているようで分かってないんだねエ。あんたが死んだら、コニカちゃんは誰が引き取るんだい？ スクラップにでも出せってのかい？」

「いや、そこはルミナが……………」

「呼び捨てにするな、たわけ。だからバカ弟子だってんだよ、なんにも分かつちやいない。あんたがいなくなるってことが、それ自体がコニカちゃんにとっては一大事なのさ。ずっと言い続けてるだろ

？ あんたの命、自分だけのものだと思うなってさ」

そう言って、ルミナは顔の右側に垂れ下がっていた髪の毛を、後ろの方へ掻き上げる。そこには、痛々しい古傷の跡が真一文字に、頬を横切っていた。

「この話は何度もしたはずだよ。重荷を背負って生きていくのは私だけでいい。あんたには、私と同じ失敗はして欲しくないのさ」

「……分かったよ」

いかにもしぶしぶといった感じではあったが、それでも一応はうなずいたコウキを見て、ルミナは満足げに笑った。

「よしよし、分かればよろしい！」

自分の用事は済んだとばかりに、コウキが手に持っているカードをひったくるようにして、ルミナはデスクの方に歩いていく。そして、電話の横に置いてあった白い長方形の機械に、そのカードを差し込んだ。カードに内蔵されたチップにデータが書き込まれ、今回の賞金が振り込まれる。

賞金稼ぎのシステムは、それを利用した二次犯罪が起ころぬよう、少々複雑になっている。第一に、誰でも賞金稼ぎとして登録できるというわけではないということだ。オフィスごとに若干差異はあるものの、その個人の能力を何らかのテストによって認められない限り、賞金稼ぎとしてオフィスに認められることはない。

そして、オフィスに認められない限り、賞金稼ぎとして生きていくことはできないようになっていく。それが第二の仕組みである。基本的に、賞金首の引き渡しなどは警察などの国家機関が行うが、賞金の配布や依頼の受け付けなどはオフィスが担当する。それらもやり取りの全てにおいて、オフィス登録の証明として得られるアイディーカードが必須となるからである。

また、賞金首を追う賞金稼ぎ同士の衝突を防ぐ意味として、一度に登録できる人数が依頼事に決まっている。依頼を完了して賞金を得ることができるのは、登録していたものだけなのだ。

「はいよ、これで依頼完了さね。ご苦労さん」

機械から取り出したカードを、コウキに返す。コウキは受け取ったカードをしばらくの間見つめていたが、すっとコートの内ポケットにしまいこんだ。

「他に何か用事はあるかい？」

「ああ、左腕の義肢の調子が、少しだけ悪い。今回の賞金で、当面の生活費は賄えるだろうから、今の内に診ておいてもらいたいんだ。あと……」

「分かってる、例の特殊弾を使ったんでしょうが？ それもすでに注文済みだよ、明日には届くはずさね。取りに来るといいよ」

「それから、コニカのオーバーホールもしておきたいんだが。何しろ少し特殊だからな、あいつは」

コウキの言葉に合わせて、コニカが頭を下げる。

「分かった、それも手配しておくよ。知り合いに腕のいい機械技師がいるからさ、そいつに頼めば、まず間違いないだろうからね」

「ありがとうございます」

コニカは深々と頭を下げる。ゆっくりと顔を上げる彼女に向かって、ルミナは片目をつぶって見せた。

「ん？」

突然、何かに気づいたように、コウキはおもむろにルミナから視線をそらした。その見つめる先は、オフィスのフロントよりも奥につながる部屋への扉であった。

一人の少女が、扉の隙間から部屋の様子をうかがっていたのである。年のころは十二、三歳ごろだろうか、まだまだ幼い雰囲気を残している。

「ルミナ、あんた、いつ子供なんかつくったんだ？ 俺、そんな話は聞いたことないんだが」

「うん？ ……ああ」

コウキの視線の先を見て、ルミナが大きくうなずいた。

「あの子は私の子供じゃないよ。色々訳があつてね、二、三日前か

らとりあえず私が預かつてるのさ。　ほら、こつちおいで」

手招きして、少女を呼ぶ。黒髪の少女は、少しためらってから、小走りでルミナのそばに駆け寄った。そして、自分の小さな体をルミナの影に隠し、彼女のスーツのジャケットをしつかと握りしめた。その体勢から頭だけをひよっこり覗かせて、恐る恐るコウキとコニカの二人を観察している。相当な人見知りなのだろう、何もしゃべろうともしない。

「か、可愛いですねー」

顔中をだらしなく緩めて、コニカがまったりと呟いた。両手をばたばたと動かし、抱きしめたいのを必死でこらえているかのような状態だ。

「可愛いだつて？　コニカ、おまえはまた何を言ってるんだ？」

「ちよつとマスター、何言ってるんだはないでしょう。すごく可愛いじゃないですか」

呆れたように言うコウキに、コニカはむすつとして反論する。その表情といったら、彼女が人間でないことを示すために装備された側頭部から覗く細長い台形型のアンテナさえなければ、誰だって彼女が人間だということを信じて疑わないだろう。いくら感情回路が一般に普及した現在であったとしても、ここまで感情豊かなガイノイドがあるはずがない。

「……まったく、やたら人間臭くなってきたと思ったら。今度は母性本能じみたもんまで、身につけやがる」

頭をがりがり掻きながら、溜息とともにぼやいた。

「ねえ。お姉ちゃん、だれ？」

ルミナの体の後ろから、少女がコニカに向かつておずおずと尋ねた。見た目よりも、しゃべり方は少し幼い感じがする。十二、三歳ごろのような印象を受けたが、もしかすると、実年齢はもう少し低めなのかもしれない。

「んー？ 私の名前はねー、コニカって言うのよ」

腰をかがめて少女と同じ視線になり、コニカがにこりと笑いかける。その笑顔に安心したのか、少女の表情が少しだけ柔らかくなった。

「……。私はね、ナミっていうの」

「そう、ナミちゃんて言うのね。可愛い名前だねー」  
名前を教えてもらったことがうれしいのか、コニカはにこにここと上機嫌で笑いながら、ナミの頭を何度も何度もなでる。いつの間にか、ナミはジャケットの裾から手を離し、隠れていたルミナの体の影から出てきていた。

「あら、もうあんなに仲良くなっちゃうなんて。私でも、慣れてくれるまで結構時間かかったのになー。もうさ、賞金稼ぎなんかやめさせて、保育園にでも務めさせたらどうなんだい？ 学校の先生とかも、案外似合うかもね」

にこやかに会話する二人を見ながら、ルミナがにやりと口の端を釣り上げる。

「無理だよ、ガイノイドなんかを保母に雇う保育園が、一体どこにあるんだよ」

「まー、そうだけどね」

コウキに冷静に突っ込まれて、ルミナはあははと笑った。

「ところで」

「

にこやかに話すコニカとナミの二人には聞こえないように、コウキはルミナにそつと耳打ちした。

「訳ありつてのは、どういうことだ？ 見たところ、普通の女の子にしか感じないが……」

「ああ、その話ね」

くるりと身を翻してルミナはもう一度机に飛び乗り、すんと腰かける。その状態でポケットから煙草のケースを取り出し、一本口にくわえた。

「あんた、本当に何も分からないのかい？ もっと良く見てみなよ」ライターで火をともし、肺まで煙を吸い込む。その濃密な味と香りを楽しみ、ゆっくりと吐きだす。満足そうに笑みをもらすルミナではあったが、コウキはそれを見て、少し顔をしかめた。昔から、煙草の臭いだけは慣れないのだ。

どうせ何を言っても、ルミナは煙草をやめることがない事を、すでにコウキは理解している。小さくため息をつき、ルミナにいわれた通りに、もう一度少女をしつかり観察してみた。

見たところ、特に変わったところは見られない。ノースリーブのワンピースに包まれた肢体は華奢で、身長はあまり高くない方ではあるが、それは平均に比べての話であって、しっかりと年齢に相応な発育状況には達している。陶器のような白い肌はなめらかで、小さな引つかき傷ですらどこにも見当たらない。よっぽど大切に育てられていたのだろうか？

いや、それはおかしい。

この時代、傷跡のない人間など、いるはずがないのである。

「まさか、いやそんなことは……」

「残念ながら、事実だよ」

突然うるたえ始めるコウキに、ルミナが短く告げた。

「私も最初は、どう考えてもあり得ないことだと思った。それで、

すぐに検査をしてみたんだけどね、結局それは、自分の仮説を裏付けることになったにすぎなかったのさ」

吐きだされた紫煙はくるくると揺らめきながら立ち上り、そして霞みと消える。それをぼんやりと見つめながら、ルミナは煙草を灰皿に押しつけた。

「じゃあ、あの娘は……」

「そう、」

灰を落とした煙草をもう一度くわえ直し、まるで独り言のように呟いた。

「もう復活は不可能だと言われて続けていた、欠陥のない完全な人間。つまり、『純潔体<sup>インセンス</sup>』さね」

オフィスから自宅へと戻る道すがら、コウキの頭をめぐっていたのは、ルミナの言葉とあの少女の姿だった。

ナミという少女が、不可能と言われていた『純潔体<sup>インセンス</sup>』であるという事。師匠の言うこととはいえ、はじめは否定したくなるような突拍子もない話だったが、冷静になってよくよく考えてみると、彼女の外見は確かにその仮説を裏付けるものだった。

たとえば、その黒髪と黒い瞳。あれはかつて、日本人を含むモンゴロイド大人種に特有の形質だったはず。遺伝子操作によって、頭髪の色も虹彩の色も自由に変えることができるようになったせいで、今となつてはその形質を両方備えている者をほとんど見かけない。それらの形質を伝える遺伝子が、あらかじめ失われてしまったからだ。ルミナの髪の毛は明るい茶色であるし、淡い緑色の髪を持つコニカが、街中で目立つということもないくらいである。たまに黒い髪や瞳を持つ者がいたとしても、それはコウキが黒髪であるように、片方だけの形質をもつものであることがほとんどであるのだ。

そしてもう一つ。傷跡一つないなめらかな肌が、どうしても気にかかってしまう。

百年前に起こったとされる、世界規模の遺伝子消失。何の前触れもなく、大量に出産された『発生異常の赤ん坊』。あるモノは腕がなく、あるモノは足がなく、あるモノは内臓の一部がなく……。重要な器官を欠損して生まれてくる子供は、胎児の段階ですでに死亡しているため、出生率は大幅に低下した。

世界の人口を半減させたとまで言われるこの突発的な先天性身体欠損症は、度重なる遺伝子操作の影響によるものだと考えられている。何度も手の入れられた遺伝子が突然変異を起こし、積み溜まったその変化が形質異常を起こしたのであろう。

それからは、狂った遺伝子を元に戻そうと、何度も何度も実験が繰り返された。しかし、一度かみ合わなくなつた歯車は、二度と元に戻ることはなかった。人間の体を好きに作りかえることなど、結局人間の手に負えるような代物ではなかったのだ。

太陽に近づきすぎたイカロスは、その羽を溶かされ、ついに海に落ちて死ぬ。神の領域へ土足で踏み込んだ人間は、果たして大きなしっぺ返しを食らつたのであつた。

もちろん、コウキヤルミナをはじめとする現在の人間も、同じことである。例をあげるなら、コウキはその左腕と両目を、ルミナは両足を欠いて生まれてきた。そしてその足りない部分は普通、義肢によつて補われている。技術の進歩により、生体と神経で連結することで自由に動かせるようになった義肢である。

だがしかし、本物と見紛うほど精巧に作られた義肢であっても、結局のところ人工物にすぎない。生体に合わせて成長することはできないし、定期的なメンテナンスも必要になる。そしてもう一つ、生体と義肢との接合部は、どんなに上手く隠したとしても、目立たないようにすることで限界なのである。つまり、今いる人間は体のどこかに、義肢と生体との接合部となる傷跡があるはずなのだ。

仮に、ナミが四肢欠損ではなく、臓器のどこかを欠損しているだけだと考えてみたとしても、それとモンゴロイド大人種の形質が同時に発現する可能性は、限りなくゼロに近い。しかも、検査したの

があノルミナである。わずかな臓器欠損であろうと見落としてしま  
うような、節穴な目ではないだろう。

そう考えるとやはり……。

それならば、一体誰が……？

「マスター、どうされました？」

ふと横を見れば、コニカが心配そうに顔を覗き込んでいた。どう  
も、かなり長い時間黙りこんでいたらしい。

どこをどう歩いたのか、いつの間にやら二人が借りているマンシ  
ヨンまでたどり着いていた。

「……………」

コウキは返事することもなく、ただ黙ったままエレベーターに乗  
り込んだ。部屋のある十二階のボタンを押す。コニカも何も言わず、  
それに従った。

コウキは迷っていた。ルミナから聞いた話を、コニカにも話すべ  
きかと。しかし、あんなに仲良く話していたナミに対して、偏見を  
持って接してほしくはない。ただの少女として、あの子に接してほ  
しい。

偏見を持って接する？

一体、自分はなんの心配をしているんだろうか？

どれだけ人間のようふるまおうと、所詮は人間ではないただの  
ガイノイド。感情を持つとはいえど、それは本物<sup>リアル</sup>ではないただの紛<sup>マシ</sup>  
イ物<sup>エイク</sup>。元をたどれば機械人形にすぎないコニカに、何を心配する必  
要があるのだろうか？

「……………ばかばかしい」

突然自分の中で沸き起こった、説明のできない奇妙な感情に、コ  
ウキは独り毒づいた。

言うべきか、言わざるべきか、そのような問題ではない。もとよ

り択一な選択肢しかなかったはず。つまり、言うよりほかに何も無い。一体、何に迷っていたのだろうか？

「コニカ、お前に伝えておくことがある」

部屋に入り、外に声が万が一にも漏れないように確かめてから、コウキはおもむろに話を切り出した。

「先に言っておくが、今から話すことは第一級機密事項とする。何があっても、他言無用だ。たとえ政府から情報開示を求められようが、な」

「了解しました、マスター」

コニカはコーヒーのそそがれたカップを盆にのせ、部屋に備え付けられたシステムキッチンからゆっくりと出てきた。湯気の立つカップをコウキの前に置き、そして彼の座っているテーブルの反対側に、対面して座った。

「先に聞いておくが、お前は『インセンス純潔体』が何を意味しているか知っているか？」

コニカはまっすぐにうなずく。

「はい、データ内に定義が存在します。『インセンス純潔体』、今は失われし、完全なる人間の子供のことです。遺伝子に人間が手を入れる前の存在であるとするため、純潔体と呼ばれています。ただし現在では、かつての遺伝子情報を復元することは難しく、基本的に生み出すことは不可能であったはずですよ」

「そう、その通りだ。だが」

「いったん言葉を区切り、両手を組んで机の上に乗せる。」

「もしも、その不可能なモノが存在していたら？」

「……、それはどういう意味です？」

コニカがきき返してくる。当然だろう、機械には言外に含まれた意図をくみ取ることにはできない。コウキはもう一度口を開く。

「つまり」

しかし、その言葉の終わりを、コニカが知ることはできなかった。続きを遮るかのように突然、コートのポケットに突っ込んである

コウキの通信端末が、けたたましい音を立てて鳴り響いたのだ。

悪態をつきながら端末を取り出すコウキは、しかしディスプレイに表示された名前を見て、その表情を変えた。

発信元は、ルミナの非常用端末。通信用ではなく、自分の身に起こった非常事態を誰かに伝えるためだけにある、最終連絡手段。

その意味するところは、つまり。

「コニカ、話は後だ。行くぞ！」

「イエス、マスター」

まさに突風のように飛び出してゆく二人。

部屋には、一口も飲まれることのなかったコーヒーが取り残され、そしてゆっくりと冷めていくだけだった。

部屋を飛び出したコウキは、マンションの一階の駐車スペースに止めてあった乗用車に飛び乗った。エネルギー不足のために電気代は高騰し、自動車を動かすための電力もその例外ではないのであるが、今回ばかりはそうも言ってられない。念には念を入れて、運転しないにも関わらず、普段から燃料を満タンにしていただけのことではあった。キーを回すと、久方ぶりの運転ではあるものの、機嫌良く一発目でエンジンが始動した。

運転操作を完全手動に切り替え、前方に障害物がない事を確認し、コウキはアクセルを目一杯踏み込んだ。

タイヤがきしむ音を立てて空転したが、すぐに路面をつかみ、そして恐るべき加速を見せつける。わずか五十メートルほどで時速百キロメートルにまで達し、誰もいない通りを、すさまじい音とともに駆け抜ける。

「マスター、飛ばし過ぎです。道交法を完全に無視してます！」  
助手席に座るコニカが、必死で警告する。

が、無視する。

そのうちに、コウキ操る自動車はハイウェイに突入した。コウキはなおもアクセルを踏み込み、スピードを上げ続ける。

カーブが来るたびに、強烈な横Gが体を襲う。それでも、速度は緩めない。

おそらく、あの少女が関係しているのだろう。「インセンス純潔体」、あの話が本当なのだとしたら、今まで狙われなかったのが逆に不思議なくらいだ。

時間がない。いや、もしかするとすでに手遅れなのかもしれない、それでも走る。

もっと速く、もっと速く。

白いボディの残像が、市内をめぐる高速道路に一本のなめらか

な線を描いた。

「マスター、お気づきですか？」

「コニカが、ハンドルを握るコウキにそっと耳打ちした。」

「ああ、分かっているよ。」

そう言っつて、ルームミラーでちらりと後ろを確認する。高速で走り続けるコウキ達のその後ろ、黒い乗用車が、ぴたりと追従していた。その姿に気がついたのは、高速道路に入っつてすぐだっただろうか。

警察関係の車両ではないのは明らかだ。おそらく、ルミナを襲撃した関係者だろう。コウキが動き出すのを予測していたに違いない。ということは、裏を返せば襲撃が失敗に終わっているということだろうか？　すでにルミナを始末しているのならば、わざわざコウキを尾行する意味もない。少女のことを知っつてしまったコウキを、口封じのために、とうに始末していることだろう。

とすると、考えられる理由は一つ。ルミナと落ち合う場所を知っつているコウキを野放しにして、どちらも同時に消してしまっつう腹積もりなのだろうか？

だとしつたらなおさら、このまま追跡させ続けたらいいか  
ない。

「コニカ、ちよつと運転を代われ。」

体を後ろにずらし、コニカにハンドルをまかせる。そのまま、すりとお互いの位置を入れ替えて、コニカが運転席に、コウキが助手席に座つた。

「このままのスピードで、ポイントS-05まで走り続ける。後方の追跡は気にするな。道交法は無視しても構わない、目的地到達を最優先に行け。」

「了解しました。」

小さくうなずくコニカを確認し、コウキは体をよじつて後方の車両をにらみつけた。障害物のない高速道路の上で追跡を撒いてしま

うのは、ほぼ不可能に近い。さらにこちらの車は、残念ながら一般車両、特別なチューンも何も施してはいない。だがおそらく、向こうの車のエンジンはかなりパワーアップされていることだろう。現在のスピードにしてもこちらはほぼ限界に近く、エンジンも車体も悲鳴を上げているのに対し、向こうはまだまだ安定した走りをしている。追跡を振り切ることもできないだろう。

だとすれば、残された手段はただ一つ。

「いくら賞金稼ぎだからって、殺しをしないとは限らないんだぜ」  
ホルスターから拳銃を抜き、スモークガラス越しに後方の車両へと狙いをつける。シートの上に膝立ちになり、ヘッドレストを両腕で挟み込んで体を固定し、そしてゆっくりと引き金を引いた。

刹那、すさまじい音とともにリアガラスが粉々に砕け散った。

後方の追跡車両は突然スリップを始め、高速道路の中央分離帯に突っ込み、そして爆発炎上した。コウキの放った弾丸が、前輪のタイヤを打ち抜いたからであった。

「お見事です」

「まあな」

拳銃をホルスターに納め、得意げに唇の端を釣り上げる。そしてゆったりと息を吐き、座席に浅く座り直した。

十分後、彼らの車は高速道路を下り、速度を落として入り組んだ街中を走っていた。特別管理区域とは違う、時代に残り残された者たちの街。簡単にいえば、下流階級の人々の住む貧困街。

特別管理区域とは明らかに違う町並みは、まるで昔にタイムスリップしたかのような錯覚を抱かせる。近代技術とは縁のない、古くからの建築法で立てられた家並み。日中であるのに外を歩く人の姿はほとんど見られない。たまに外をふらついている人を見ても、身に付けている義肢は、金属製の部品がむき出しになっている一昔前の不格好なモデルであった。

遺伝子消失の混乱により、政治機能を著しく低下させた日本の政府機関は、特定の地域、すなわち特別管理区域を除いて、一切の関与を放棄してしまった。もちろん、警察などといった政府の法務機関の目が行き届くことはない。その結果、それらの地域は完全なる無法地帯と化した。確かに、日本という国を存続させるためには致し方ない決断だったとはいえ、結果的に彼らは日本の大部分の地域を切り捨ててしまったのである。

必然的に、中流階級以上の人々は管理区域内へと移住し、下流階級の人々は貧困街へと押しやられ、取り残されたのであった。人々は日々を生き抜くことに必死で、そのためには手段を選ばないものも多い。どれだけ自警団を増やそうが、犯罪が減ることはない。

力さえあれば、どれだけ犯罪に手を染めても、捕まることはない。ただし、弱ければ片っ端から食い物にされてゆくだけ。

しかし裏を返せば、この街は何物にも捕らわれることのない、隠れ家にはもってこいの場所。犯罪者はもちろん、それを狙う賞金稼ぎでさえも、この街があるからこそ生活が成り立つのである。

そんな街の一角に、ルミナは自身の隠れ家を設けていた。ポイントS-05、貧困街の中心地、治安の悪い貧困街の中でも、極めつけにガラの悪い地域である。武器も持たずに出かければ、たとえ男であっても五メートル歩くまでに拉致されかねない、そんな場所。

小さい頃、まだルミナの下で修行していた時に、一度だけ連れてこられたときがある。いざという時は、ここに逃げ込むように何度も諭されたものだ。相変わらず雑然とした街並みを眺めつつ、コウキはそのおぼろげな記憶を呼び覚ました。

「マスター、到着しました。ポイントS-05です」

ゆっくりと自動車を停車させ、コニカが静かに告げた。目の前には、ただのあばら家にしか見えない、適当な作りのバラックが建っていた。こんなところが隠れ家であるとは到底思えないが、しかし目的地としては間違っていない。

コウキはうなずき、するりと車から降りた。時間はまだ正午を過

ぎたあたり。日の光が高々と、南の空に照っている。ぼろぼろに浸食されたアスファルトに、コウキの影が黒々と映った。

「コニカ、例の処置を頼む。少々もったいないが、これでは目立ちすぎるからな」

「了解、すでにルートはインプット済みです。すぐに発進させます」  
コニカが言うや否や、二人の乗ってきた乗用車は無人のまま発進し、そのまま突き当たりの通りを右に折れた。乗ってきた車が原因で、せつかくの隠れ家が突きとめられてはどうしようもない。所詮はカモフラージュにしかならないだろうが、自動操縦により、海に転落するまで走り続けるようにインプットしてある。背に腹は替えられないということである。

「行くか。周りに意識を向けておけ」

コニカに注意を促し、あたりに人がいないのを確認してから、コウキは小屋の扉のノブを回す。錆ついたちようつがいをきしませながら扉は開いた。小屋の中は薄暗く、長年使われていなかったせいか空気が淀んでいて、ほこりっぽかった。そして中には誰もおらず、無人だった。

コウキは迷わず小屋の真ん中まで歩いて行って、おもむろに床板をひっぺがえした。積もり積もったほこりが一気に舞い上がり、コウキ達の視界を真っ白に染め上げる。それが少しおさまって、再び視界が開けた時、引きはがされた床板のあったところには、小さい機器が埋め込まれていた。

「あつた、これだ……」

探し物を見つけたコウキは、自分だけに言い聞かせるようにひっそりと呟いた。

見つけ出した装置に、コウキはそつと人差し指の先を触れさせる。コウキの指紋が読み取られ、照合しているのだろう。しばらくの後、小さく電子音が鳴り、解錠される音がかすかに聞こえた。

それと同時に、音も立てることなく床がせりあがってくる。ぼつかりと空いた空洞は階段になっていて、どうやら地下へと続いているようだった。ひんやりとした空気が、穴の奥から流れ出てくる。

「コニカ、俺が先に降りていく。後ろの警戒を頼んだ」

「イエス、マスター」

短いやり取りを交わして、コウキは階段を下って行った。あのような場所に長居は無用だ。簡単には見つからないようにカモフラージュされているものの、どんなに些細なことではれてしまうか分かったものではない。

しばらく進むと、背後で入口が閉まる気配がした。差しこんでいた光は完全に途絶え、あたりは真の闇に包まれた。

コウキは暗視装置を起動させ、なおも階段を下り続ける。先の見えない闇、しかし進む道は一つしかないのだから。

どれほど歩き続けたらどうか、分からない。闇の中で長時間を過ごしたせいで、時間間隔はとうの昔に狂ってしまっている。いい加減、永遠とも思える階段に嫌気がさし始めたころ、コウキの足は段差ではない平坦な床を踏みしめた。とうとう長い階段を下りきったのだった。

地上からの距離を考えて、だいたい地下五十メートルの位置に達しているのだろう。周りを見回してみると、予想に反してかなりの広さがある。あまりに巨大すぎて、どれほどの高さがあるのかどうかも分からないくらいである。一步踏み出すごとに、足音が周りの壁に反響した。

「マスター、もしかしてここは……」

「ああ、そうだろうな」

囁きかけるコニカの言葉に、うなずき返す。

「かつての貯水タンクの名残か……」

かつて政府機関が、日本の国土中に影響力を誇っていた時代。台風や集中豪雨などの自然災害による洪水や河川の氾濫などを防ぐため、地下に巨大な貯水タンクを建設する計画があったらしい。ある地域では実際に建造されたりしたらしいが、計画倒れになってしまったところも少なくはない。もちろん、記録に残されずに忘れ去られてしまった場所も、きつと存在していることだろう。つまりここは、忘れ去られた貯水タンクのうちの一つなのだ。

以前に訪れた時は、ここがどのような場所なのかは分からなかったが、今考えてみれば正直ルミナという女性のあり方が分からなくなってくる。一体どうやって、彼女は忘れ去られた貯水タンクの存在を知ったのだろうか？ きつと、今のコウキでも推し量れないような何か、ルミナにはあるに違いない。

「マスター、ここにルミナさんはいらっしゃるのですか？」

コニカの問いに、コウキは小さく首を振る。

「いや、ここじゃない。俺の記憶が正しければ、たしかあのあたりに……」

言いながら、コウキはいましたが降りてきた階段とは反対の壁に向かつて歩き出す。さすがに広いタンクの内部、横切るだけでもかなりの時間を労する。まあ、建造された目的を考えれば、これほどまでの広さが必要だった理由は明白なのだが。

反対側の壁に行きあたったコウキは、さらにそこから壁沿いに右方向へ歩き出した。そしてしばらくしたところで、再び立ち止った。「あつた、こいつだ」

しゃがんだコウキの足元には、高さ五センチ横幅十五センチの長方形の横穴があった。その穴に、こんどは右手を手首まで突っ込む。カチリ、と音がして、なめらかだった壁が突如引っ込み、そして

通路が現れた。

「……誰？」

奥の方から、かすかに声が聞こえた。記憶に間違いがなければ、この声はナミだったはず。声の調子から察するに、おびえてはいるものの怪我などはなさそうだ。

「ナミ？ そこにいるの？」

コニカがこっそりと言葉を掛ける。

だがその時、彼の鼻は嗅ぎ慣れた、不快な臭いを感じ取った。

「これは、血の臭いか……！？」

あわてて走り出す。

たいした距離のない通路の奥は、ちょっとした小部屋になっており、小刻みに震えるナミの姿はそこにあった。

そしてその傍らには、うずくまったまま動かないルミナが、血の気の引いた表情でそこにいた。

わき目も振らずルミナのそばに駆け寄り、コウキは体を抱き起した。脈拍と呼吸を確認する。

まだ大丈夫、生きています。

「おい、ルミナ。大丈夫か？ しっかりしろ！」

何度も何度も体を揺さぶる。しかし、彼女の頭は力なく前後に振れるだけだった。

右の肩口からの出血が激しい。流れ出た血液が水溜りのように、床をしとどに濡らしている。このままでは、止血が上手くいく前にショック死を起こしかねない。

「コニカ、人工血液のシリンダーをよこせ。あと、止血帯もだ」

ナミのそばで様子を見ていたコニカに、鋭く指示を出す。コニカはすぐに、左の二の腕に内蔵されていた赤黒いシリンダーを取り出し、コウキに放ってよこした。何か起こったときのためにと、念には念を入れて常備しているモノが役に立った。

首筋に浸透圧注射器の針をあて、引き金を引く。通常の五倍の酸素運搬能力を有する人工赤血球を多数含む溶液だ。ルミナの顔に少しだけ、血の気が戻った。何とかなるかもしれない。コニカから受け取った止血帯を巻きながら、コウキは少しだけ安堵のため息をついた。

そのまま、失血による血圧低下を防ぐために生理食塩水を点滴しながら、ルミナは安静に寝かせておく。へたに動かすよりも、当分はこうしておいた方がだいぶマシだろう。できる限りの手は尽くした。意識が戻るかどうかは、ルミナの生命力次第だ。

細く長く息を吐き出し、コウキはナミの方へ向き直った。義眼に装備された暗視装置のおかげで視界を確保できるコウキと違って、今のナミは何も見えてはいないはず。何も見えず、何も聞こえない世界で、しかも頼みの綱のルミナは刻々と死へ近づいてゆく。よく

もここまで耐えたものだ。その精神力には感服する。

だがそれでも、何が起こったのか詳しい話を聞かなければならない。年端もいかない少女に、これ以上の無理を強いるのは酷だというのは重々承知している。しかしこの状況を脱却するためにも、何とか現状を把握しておかねばならないのだ。

あえて心を鬼に変え、コウキは重たい口を無理やり開いた。

「ナミ、聞きたいことがある」

「っ！」

コウキの声にナミは鋭く反応した。必死で膝をかき抱き、何も見えない闇を見透かそうとするかのように、目を大きく見開いてあたりをうかがっている。

当然と言えば、まさに当然の反応だろう。ただでさえ人見知りの激しかった子である。もはや正気を保つだけでも精一杯に違いない。そんな彼女を、コニカがやんわりと抱きしめた。

「……ナミちゃん、心配しなくてもいいのよ」

そう優しく、耳元で囁きかける。そつと、まるで壊れ物を扱うかのように。いや、まさに彼女は壊れ物なのだ。丁寧に扱わないと、すぐに碎けてしまうような……。

コニカの声で、ナミはとりあえず落ち着きを取り戻してきたらしい。表情もいくぶん柔らかくなり、強張らせていた体も、適度に力が抜け、リラククスできている。

どうも焦るあまりに、大切なことを忘れてしまっていたらしい。たとえこの状況を乗り越えたとしても、このかわい少女を救えなければ、それは上手くいったとは決して言えない。そもそも、何のためにルミナはここまでの大けがを負ったのか、それを忘れてはならない。

「すまんかった」

少女を刺激しないよう、コウキは小声で謝った。今度は少女もび

くつくことはなく、小さくうなずいてまで見せた。

「ふふふ……、コウキも、一人前に、自分の、悪かったところを、分かるように、なったんだね……」

ふとコウキの背後から、息切れしながらも皮肉る声が聞こえてきた。反射的に振り返ると、顔をしかめつつもルミナが肘で体を支えながら上半身を起こしていた。

先ほどまでは真っ青だった顔色も、少しはマシになってきているようだ。コウキが心配そうな顔で見つめているのに気付くと、バツが悪そうに苦笑いを浮かべた。

「まったく、私も仕方ない女だねえ。弟子に、死ぬなって言つといて、自分は死にそうに、なつてんだから。世話ないね、ほんとにさ」  
ひどく傷むのだろうか、右肩を抑えながらルミナは続ける。

「馬鹿、俺はあんたのことは師匠として尊敬してるさ。たかだか一度くらいこんなことがあつたつて、それが揺らくことはない。あんたの言ったことが間違つてるとも思わない。だから、もう喋らないでいい」

そつと寝かしつけようとするコウキの手をやんわりと退け、ルミナはなおも続けた。

「へましちまつたのさ、私も腕が落ちたもんさね。気づけるポイントは、ゴマンとあつた、なのに、気付けなかつたんだよ……。あの時、あんたが、ウチのオフィスを出て行つてすぐ、二人組のハンターが、依頼受理に来た。その時に、思つたんだよ……。この二人の顔を、私は見たことがないなつてね。それもそのはず、アイディーカードは、偽造されたもの、そして肝心の守衛は、殺されてたんだからね。狙いは、分かつてる、ナミだよ……。ま、間一髪で脱出できただけでも、良しとしなくちゃ、たとえ肩をぶち抜かれたとしてもさ……」

普段からおしゃべり好きなルミナではあつたが、今は変に饒舌だった。しかも、声にいつものはつらつとした張りが無い。言葉が闇に解けていくかのようによく小さく、語尾が虚空にはかなく消えていく。

言葉を発するのさえ、かなり辛そうだ。だが、それでもなお喋るのを止めようとしめない。

「コウちゃん、悪いけどあんたさ、ナミを守って、やってくれないか？ あの子はねえ、まだ何にも知らないんだ。どこにも、行ったことないんだ。びっくりするよ、雨を初めて見たのが、つい二、三日前だなんて。と言うより、青空を知ったのが、太陽を知ったのが、白い雲を知ったのが、ほんの最近なんだ……」

そこまで言っただけで突然、がばりと体を起こし、コウキの胸にむしやぶりついた。そして、普段なら決して見せないような鬼のような形相で、かすれた声とともに叫んだ。

「お願いだ、あの子に、あの子に世界を教えてやってくれ……！」  
「ああ、分かった。何があっても、彼女は必ず守り抜く。だから安心して、おとなしくしておいてくれ」

そつと諭すように言っただけで、ようやく安心したのかがくりと力なく倒れて、ルミナはそのまま深い眠りについた。

「コニカ。今の音、聞こえたか？」

うとうととまどろんでいたコウキは、ふと何かの音を聞きつけ、隣で待機しているコニカに訪ねた。コニカは手短にうなずいて見せる。

「かすかな物音ではありますが、間違いありません。何者かが、このすぐ近くにまで侵入してきているようです」

さつと、コウキの表情に緊張が走った。今動けるのはコウキとコニカの二人だけ。ナミはこの暗がりでも何も見えないし、たとえ見えたところで戦闘要員として期待するわけにもいかない。ルミナに至っては、右肩の負傷により、いまだに眠りについたらまだ。彼女も戦力として数えることはできないだろう。

だとすれば、二人で彼女たちを守りながら戦うほかない。消耗戦はじり貧になるだけだ。なら、さつさと脱出の準備をする必要がある

る。場所が割れてしまった以上、隠れ家といっても安全ではないのだから。

「おい、ルミナ。おい。起きてくれ」

頬を二、三度軽くはたくと、小さくうめき声をあげて目を開けた。まだ本調子ではないのだろう、焦点が定まっていない。

「誰かがこの近くにまで侵入したみたいだ。早く逃げないと、手遅れになる。動けるか？」

「……、ああ。なんとか行けそうだよ」

壁に手をつけて体を支えながら、ルミナはふらふらと立ちあがった。だが、言葉とは裏腹に膝は震えているし、とてもじゃないがまともに歩けるとも思えない。一体どうしたものか。考えていると、ルミナが部屋の奥を指差した。

「脱出口は、万一のことを考えて、部屋の奥にもう一つ、作ってある。地上まで、一息で到達できる、エレベーターを通してあるのさ」

確かに、ルミナの言うとおり、部屋の奥にはもう一つ扉があった。あれが彼女の言う、直通エレベーターなのだろう。扉を開けると、電気がまだ生きているらしく、赤々と中の明かりがついた。急に目に飛び込んできた光に目を細めながらも、ひとまずコニカとナミが乗り込んだ。

そして、ルミナを支えたコウキが乗り込もうとした時、今の今までふらふらに違いなかったルミナが、恐るべき力でコウキを突き飛ばした。予想だにしないルミナの行動に、コウキは耐えきれずによるけ、狭いエレベーターの中に倒れこんだ。

「ルミナ！ なんのつもりだ!？」

思わずどなり声を上げる。だが、顔を上げたルミナは、晴れやかな笑みを浮かべていた。どこかに消えて、なくなっていくってしまいうそうな。

ゆっくりとした動作で、彼女はポケットから煙草のケースを取り出し、一本加えて先端に火をつけた。深く煙を吸い込み、そしてゆっくりと、すべてを吐き出す。

「残念ながらね、そのエレベーターは、三人乗りなのさ。というわけで、あんた達で、定員オーバーなわけ。私はここで留守番さ」

「そんな……！」

「……………」

コニカは悲痛な声を上げ、ナミは声を失くした。

「ちょ、待て！ そんなことだったら、俺が！」

あわてて飛びだそうとしたコウキだったが、エレベーターのドアは非情にも、二人の間を断ってしまった。

「馬鹿だねえ、あんたは。私が生き残るより、あんたこそが、生き残るべきなんだよ。覚えてるか？ ナミを守ってくれて頼んだ事さ」

ルミナのその言葉を聞いて、コウキは思わず息をのんだ。もしかすると、あの言葉を言った時にはすでに、こうなることを予想していたのではないのか？ ここで自分が死んでいく覚悟を決めて、それであるようなことを自分に頼みこんだのではないか？ もしそうだとするならば、自分はなんと鈍い人間なのだろうか。

隠し部屋の向こう側で、大勢の人間がうるつく足音が響いている。この部屋が見つかるのも、もはや時間の問題だ。

ルミナは最後の服を終え、吸い殻を足元に捨てて足で火をもみ消した。

「コウキ、最後にこれだけは言っておくよ」

鋭いまなざしでコウキを見つめ、ルミナは言う。

「正しい行動かどうか、深く考える必要はない。そんなものは、誰か別の人間が判断すべきことだ。あんたはただ……」

自分の行動に嘘をつくな。

ルミナがエレベーターの発進ボタンを押したのと、隠し部屋の扉が爆破されたのは、ほぼ同時だった。大勢の兵士が銃を構えて部屋の奥に立っていた、それでも最後まで、ルミナは透き通るようなま

なざしてこちらを見つめていた。

上昇してゆく小さな箱の中で、三人は激しい銃声を聞き、そして  
すさまじい爆発の振動を感じた。

地上にまで到達した三人は、近くの倉庫に隠されてあった自動車に乗り込み、全速力でその場から移動を始めた。追っ手に見つかからないよう、出来るだけ遠く離れた場所まで、逃げておかなければならない。

だが、猛スピードで走行する車内は、異様な雰囲気にも包まれていた。全員の頭の中に、最後に見たルミナの姿がこびりついているのだ。

心の奥まで見透かされてしまうような、あの澄んだ眼差し。自分の死が間近に迫っているにも関わらず、その瞳は微塵も揺らぐことはなかった。

銃声の後に感じた、あの爆発による衝撃。おそらくルミナは、息絶える直前に自爆して果てたのだろう。重症を負っていないとも、あの状況で生存しているとは、とてもではないが考えられない。

しかしそれでも、コウキはルミナの死を完全に受け入れられずにいた。

「くそっ！」

握ったハンドルに、右拳を打ちつける。裏の世界で生きてきた以上、人の死も、腐るほど見続けてきたはずだ。それなのに、身近な人物が一人死んだくらいでたやすくも動揺してしまう自分が、たまらなく情けなかった。それと同時に、ルミナがそれほどまでに自分の中で大きな存在であったことに、今更ながら気づくのであった。

「マスター」

後部座席でナミを抱きしめるように座るコニカが、そっとコウキに語りかけた。

「どうした、何かあったのか？」

「追っ手です、もう見つかってしまったようです」

すっと上を指差すコニカにつられて、コウキはフロントガラスか

ら上空を見上げた。

「ちくしょう、馬鹿に早いな。どうして見つかった？」

どうして今まで気付かなかったのだろう、自動車のすぐ真上につけるようにして、黒い大型ヘリが悠々と上空を旋回していた。攻撃してこないところを見ると、やはりナミを傷つける事を避けているのだろう。振り切りたいが、相手がヘリだと隠れるのは不可能だし、あの距離になると、拳銃ではもはや撃ち落とすこともできない。

しかも良く見てみると、ヘリのボディの横側に、政府機関であることを示すロゴマークが貼り付けられていた。成り行きは分からないが、どうも厄介なものを敵に回してしまっただらう。ただのころつき集団相手の方が、どれほど楽だったことか。コウキは鋭く舌打ちをした。

「マスター、もしかすると……！」

コニカが何かに気づいたように突然、声を上げた。そして、ナミの体を頭のとっぺんからつま先まで、舐めるように見回した。その視線は丁度、少女の胸のあたりで止まった。

「コニカ、何かわかったのか？」

コウキの言葉に、一瞬だがためらいのようなモノを見せた後、おもむろにコニカは口を開いた。

「発信器です。ナミちゃんの体の中に、小型の発信器のようなものが埋め込まれています」

「は？」

コウキは思わず、わが耳を疑った。確かに今、彼らが陥っている現状を考えると、そのような結論に達するのは別段不思議なことではない。だが、ナミの体内に人工物がない事は、ルミナがすでに確認済みである。にもかかわらず、コニカは発信器が埋め込まれていると言う。ならば、一体どちらが正しいのか。

「発信器といっても、有機物を利用したX線完全透過性の装置です。微弱な電波を感知することで存在を確認しましたが、それ以外の方法で発見することは、おそらく不可能ではないかと……」

「そうか。ならその装置、摘出することはできないのか？」

どうもコニカの言う方が正しいようだ。ならば、その発信器を使いものにするほかに、逃げ切るすべはない。どこへ隠れようとも、きつと見つかってしまうからだ。現に、電波の届かない地下に潜っても、時間がかかったとはいえず、結局は発見されてしまったではないか。

しかし、コニカは力なく首を横に振った。

「それも検討してみました。危険です。発信器は、ほぼ心臓に隣り合う位置に埋め込まれています。設備の整った場所ならともかく、高速で移動する車内で摘出を実行するなど、正気の沙汰とは思えません。せめて振動でもなければ、話は別だと思つのですが……」

心底悔しそうに顔をゆがめる。コニカがそう言うからには、おそらくそれが事実なのだろう。だが、何とかしなければ逃げ切れないできないのなら、何か他の手立てを考えないと……。

「コニカ、逆探知で発信場所を特定できないか？」

「やってみます」

そう答え、コニカは両目をつぶって意識を集中させた。

「ごめんなさい」

重苦しい空気の漂う中、ナミがぼつりと一言呟いた。

「私がいるから、ルミナさんは死んじやっただし、コニカお姉ちゃんたちにも迷惑かけちゃってるし……」

肩を震わせながら、ナミが謝る。心の底から、絞り出すような声で。車内の時間が、止まってしまったかのように感じる。小さなしずくが、彼女の膝の上にぼつりと落ちた。

「こんな思いをするくらいなら……」

いっそのこと、生まれてこなければ良かったのに。

「それは違うな」

涙を浮かべた目で見つめてくるナミを、ルームミラー越しに見返しながら、コウキはそう言い放った。

「どんな人間であれ、生まれてこなくても良かったなんて存在は、ありはしない」

「でも、私なんかが生きていたから……」

「生きることは、罪じゃない」

なおも言い募るナミの声にかぶせるようにして、コウキはびしやりと言い切る。

「人間は生まれた時から罪を背負っているだとか、そんな馬鹿馬鹿しい考えなんて止めつちまえ。人は何のために生まれてきた？ 生きるためだろうが、生きて、生きて、何かを見つげるためだろうが、それでも生きることが罪だっていうんなら、俺は止めない。でもな、ナミ」

「一息を吸って、

「お前は一体、何を見つけた？」

「そう続けたのであった。」

「……………」

ナミはじつと動かないまま前を見つめていたが、そのまま声もなく崩れ落ちた。押し殺した嗚咽とともに、肩が小刻みに震える。今まで抑えていた感情が、一気に噴き出たのだろう。

そして、

「……………生きたい」

と、そう呟いたのだった。

「よし、分かった！」

唇の端を釣り上げるようにして、にやりと笑みを浮かべる。

「マスター、場所の特定ができました。特別管理区域の中心部、政府直轄の研究施設のあたりです」

逆探知が終わったのか、両目を再び開いたコニカが、場所の報告をする。

「やはり政府がらみか……」

乾いた唇をぺろりと舐めて、咳く。そうして今までの重い空気を振り払うかのように、コウキは高らかに宣言する。

「よし、今からそこをぶっ飛ばしに行こう。ただ尻尾巻いて逃げるのは性に合わないんだよ、昔っからさ。さっさと始末して、それから堂々と逃げようじゃないか！」

上空から追いかけてくるヘリコプターを車が振り切るには、一体どうすればよいだろうか。答えは簡単だ。ヘリが追ってこれないような場所を走ればいいだけの話である。

発信器によって場所が特定されている状態で逃げるのならば、一体どうすればよいだろうか。答えは簡単だ。発信器の出す電波を受信されないように、こちらからも妨害電波を出せばいいだけの話である。

コウキ達は、五十年ほど前まで都心の中心部を網目のように走っていたとされる、地下鉄道の路線を頼りに、政府直轄研究施設の近くにまでたどり着いていた。たとえ機動性の高いヘリだとしても、地下を走るトンネルのような狭いところでは、上手く飛ぶことはできない。さらに、ナミに埋め込まれた発信器と波長を同調させた通信機を暴走させることで、電波を相殺させ、コウキ達は一時的とはいえ、完全に追跡の目を欺いていたのだった。

「マスター、もうすぐ研究施設の真下に到着します」

「了解」

うなずいて、アクセルから足を離し、エンジンブレーキを利かせながら、スピードを少しずつ落としていく。

「あと五十メートル、四十、三十、二十、十、……」

カウンタとともにブレーキペダルを徐々に踏んでゆき、コニカのゼロの合図とともに、ぴたりと停車させた。このあたりのコンビネーション、お互いの呼吸を知っているからこそ、できる芸当であるのだろう。

「この真上の施設を、とりあえずぶち壊せばいいんだな？」

ちらりと上を見て、コウキが不敵な笑みを浮かべる。

「では、作戦通りに？」

「ああ、俺は単独で行動し、研究施設の主要部分を破壊する。必要とあらば、責任者も消す。その間、コニカはナミを連れて、おとりになってくれ。危険だが、やってくれるな？」

「マスターのご命令通りに」

いくぶん芝居がかった態度で、コニカはコウキに頭を下げる。今までコニカがこのような言い方をするのは、聞いたことがない。ルミナの死を経て、一段と人間に近づいてきているらしい。

だが、こんな雰囲気の中で皮肉っぽく言い返せるガイノイドというのも、悪くはない。コウキはにやり笑いをますます大きくして、そして言った。

「さあ、おっぱじめるか」

研究所の内部は、数日前から何やらあわただしい雰囲気を漂わせていた。聞いた話によると、貴重な実験体が研究員の隙を突いて脱走したらしい。丁度システムの異常で、メインコンピューターの制御ができなくなっていた時だった。発信器を埋め込んでいたのだが、メインコンピューターがダウンしていたのでは、それを使って追跡することもできない。

とはいっても、それは研究所の中でも上層部に位置する、幹部クラスの所員にしか関わり合いのない話。その他大勢の下っ端所員には、何が起こっているのかすら聞かされていないのだ。だがそれでも、所内の空気がどこかふだんと違ってのことくらいは、簡単に察知できる。

丁度その時も、不思議な緊張感を肌に感じながらも、皆は普段の勤務に励んでいた。

前触れもなく突然、建物が大きく揺れた。

壁がきしみ、床が悲鳴を上げる。突発的な揺れは、数秒と立たないうちに収まったが、研究所の職員たちの心まではそうはいかない。興奮した人々は口々にしゃべりだし、静かだったホールは騒然となった。

そしてその騒ぎの真ん中を、一人の見慣れない服装をした男が一人、わき目も振らずに疾走していた。真っ黒のロングコートをその身にまとい、彼は広いホールをあっという間に駆け抜け、そして皆の視界から消えた。言わずもがな、まんまと侵入に成功した、コウキの姿であった。

コウキはエレベーターを使用せず、階段を三段飛ばしに駆けあが

っていた。情報は、ナミの証言のみ。彼女が覚えていること、ただそれだけが頼りだ。

ナミが言うには、彼女が閉じ込められていた部屋は、八階の五号室であったそうだ。あつという間に八階までのぼりつめたコウキは、階段を出てすぐ正面、エレベーターホールの手前に位置する五号室の前に立ち止った。

ナミの言う事が正しければ、ここにこの研究所の施設のメインコンピューターが設置されているはず。意を決し、コウキは拳銃を右手に握りしめ、左手を力の限り振りかぶった。

鋼鉄製の義肢で殴りかかれば、たいていの扉などは、鍵がかかっていようがいまいが、簡単に吹き飛んでしまう。この扉とて、例外ではなかった。あつけなくその部屋の全貌をさらけ出した。

「……なんだ、これは……？」

部屋の内部に足を踏み入れたコウキは、思わずあつけにとられ、ただそうつぶやくだけで精いっぱいだった。

そう、そこにはメインコンピューターなんてものはなかった。薄暗い部屋の内部に、代わりに安置されていたのは、直径二メートルはあろうかというシリンダー。その内部は一樣に緑色の水溶液で満たされ、なにやら人の形のようなモノが、どの筒の中にも浮かんでいた。

それは人のような形をしていて、それでいてヒトではなかった。どれもが悲惨な姿をしていた。

手足のないもの、内臓がないために腹がぼこんとへこんでいるもの、頭部がなくカエルのような顔をしているもの、逆に異様なまでに後頭部が膨れ上がっているもの。

だがそれはまだ、人の形をしているという点でいえばまだマシンな方なのかもしれない。中には、もはや別の生き物にしか見えなような、そんなおぞましい遺体までもが、シリンダーの内部に溶液に浸かって浮かんでいたのである。

しかもそれらはすべて、小さな赤ん坊程度の体しか持つてはいな

かった。きつと生まれると同時に殺され、標本にされたのだろう。

こみ上げる吐き気を抑え込み、コウキは部屋の奥へと足を進めた。  
「やあ、よく来たね」

突然、背後から声がかかった。

反射的に振り返ると、中肉中背の何の変哲もないただの男が、白衣をまとってそこに立っていた。

「君のことは、良く知ってるよ、コウキ・クロサワ。貧困街出身の賞金稼ぎ。親とは幼いころに死別。以後、親代わりに育てられたルミナ・クロサワから、賞金稼ぎとして生きていくための術をたたきこまれ、今日に至る。その義眼も義手も、ルミナから与えられたものだ」

「どうしてお前が、そこまで俺のことを知っている……!?!」

すらすらとコウキの生い立ちをしゃべる白衣の男を、コウキは歯を食いしばって睨みつけた。白衣の男は、そんなコウキの様子を見て、柔らかな笑みを浮かべた。

「そうそう、ボクが名乗らないのもおかしいよね。ボクの名前はアキラ・カスカベ。驚いているようだけど、こんなことを調べるのは、たいして問題じゃない。敵の情報を知っておくのは、重要なことだからね。だけど、ボクは無用な戦いは好まない主義なんだ。だから、単刀直入に言うよ」

「断る」

「あら」

勝手にしゃべり続けるアキラに対して、コウキは何も言う前から、ぴしやりと要求を跳ねのけた。

「まだ何も言っていないんだけどな」

「言わんでもいい、見当くらいつくさ。どっちにしろ、俺はお前みたいな男の頼みなんざ、聞きたくもない」

「これはこれは、ひどく嫌われたもんだね」

この期に及んで笑いながら、アキラは頭をかいた。

「ボクの研究は、人類を救うためのものなのに。そのために、あの

『<sup>インセンス</sup>純潔体』が必要なんだ。純潔体のクローンを生み出し、今の僕たちが持つているポンコツの遺伝子を全世界から駆逐する。そうすれば、何もかもが上手くいく」

そう言っただけアキラは、周りに立つシリンダーを見回した。

「あれは、ボクが二十年以上かけて生み出した、傑作だよ。途中、何度も失敗したけどね。元の遺伝子を復元するための遺伝子操作は、予想以上に困難だったのさ」

「その失敗の過程が、この子たちか……？」

「ああ、そうさ」

少しも悪びれることなく、アキラは肯定する。

「偉大なる工程には、犠牲はつきものなのさ」

その時ようやく、なぜこの男が気に入らなかったのか、コウキは気付いた。この男、人の命というものを理解していないのだ。ただ大義名分を掲げ、それだけに固執する、狂気の塊なのだ。

それを確信し、コウキは再び訪ねた。

「あの子を、どうするつもりだ？」

「ああ、純潔体ね」

よくぞ聞いてくれたと言わんばかりに、アキラは自慢げに口にする。

「彼女は大切に扱ってもらうつもりさ。何せ、貴重な純潔体のオリジナルだからね。細胞の老化を防ぐために、冷凍睡眠にでも、掛けておくつもりさ」

まるで買ってきた肉が傷まないように冷凍保存しておくかのようだな、そんな何気ない言い方だった。

「狂ってる」

「そう思うかい？」

「ああ、少なくとも俺はそう思うさ」

「……、そうか、残念だね」

そう言っただけ、さびしげな笑みを漏らしたのもつかのま、一瞬でアキラの姿が視界から消えた。

この感覚には、覚えがある。

とつさに後ろに飛びのき、構えた拳銃を撃った。

丁度、コウキがさつきまで立っていた場所、そこにアキラの拳が突き刺さっていた。もうもうと立つ土煙。そしてコウキの放った弾丸は、予想通りにアキラの体を傷つけることなく、床に落ちて散らばった。

「ふうん、いい動きだね。さすが、賞金稼ぎとして生きてきただけのことはある」

すつとコウキに向き直るアキラは、両手をはたきながら賞賛の言葉述べた。

「あんただって、なかなかのもんじゃないか。デスクワークのくせにここまでの動きをされちゃ、賞金稼ぎの名が泣くぜ」

コウキも負けじと、皮肉で返す。

「それよりも、どうしてあんた一人しかいないんだ？ ここには警備兵とか、いるはずだろう？」

「いいのさ。あんな集団を呼んだ日にゃ、ボクの研究成果達が、みんな壊れてしまっただろ？」

それは言外に、おまえを倒すのに助けなどは必要ない、という意味を含んでいる。舐められたものだ、とコウキはそう感じた。

だが、手だてが何もないというのも事実ではある。あの動き、そしてマグナム弾の通じない体。おそらくあれは、トウマ・アラキ確保の際に戦ったサイボーグと同じ体なのだろう。しかも、性能はこちらの方がはるかにいいはず。

あの時は、特殊弾があつたからどうとでもなった。ただし、今回はそれがない。相手の生死は問わないこの戦い、勝つためには危ない橋を渡る必要がある。

「なにをぼつととしてるんだい？」

息つく間もなく、ただ愚直に突っ込んでくるアキラ。明らかに素人戦法ではあるが、それに莫大な戦力が備わっているから、逆にたちが悪い。戦闘時におけるセオリーが通じないのである。

体勢もまともじゃないままで殴りかかってくる体は、通常なら少し力を加えるだけで、簡単に吹き飛ばすことができる。だが、今のアキラに対して同じことをやっても、吹き飛ばされるのはこちらだろう。それほどまでの力とスピードが、彼にはあるのだ。

紙一重のところであわし続けるコウキだが、それもいつまでも続かないことは、先の戦闘で証明済みだ。コウキは腹をくくった。

「何の真似だい？　とうとうあきらめたとか、そんなことかな？」  
アキラはコウキのとった行動を見て、勝利を確信したのかほくそ笑んだ。

コウキは無防備にも両手を下げて、ただその場に棒立ちになっていたのだ。そんな体勢では、アキラの突進をかわすことなどできずに、正面からぶつかってしまう。しかしコウキは、顔色一つ変えず、ただすつと、左手で手招きをした。

「　　っ！」  
コウキの態度に腹を立てたのか、その瞬間アキラの姿は視界から消えた。

この時を、待っていた！

コウキは両足を大きく広げ、左拳を斜め前へと突きだした。  
金属製の拳と拳がぶつかりあう。

「があっ！」  
叫び声を上げたのはコウキだった。肩を覆ってほぼ全身を義体に変えているアキラとは違い、コウキのそれは、せいぜいが肩甲骨あたりまで。激突の衝撃を受け止められるほど、コウキの体は丈夫ではない。

コウキの義肢は、ガードが吹き飛び、人工筋肉が裂け、油圧式オイルが飛び散った。

それでもコウキは、その場からびくともしなかった。

そして、同時に拳銃を持った右手を上げ、笑った。

「これで、チエツクメイトだ」

放たれた弾丸は、寸分たがわずアキラの口内に飛び込み、延髄をぶちぬいた。

## エピローグ

『今回は上手くいった。』

しかし、すべてが終わった、とは言い難い。

とりあえず、あのシリンダーのあった部屋は爆破し、続いてコンピュータールームも爆破に成功した。その結果、ナミの発信器は無用の長物となった。

だが、政府が関与していた計画だ、いつ何時、同じようなことが起こるか分からない。

その時に俺は、どうするべきなのか？

今はまだ、答えは出ない』

「あれ？ マスター、何を書いてるんですか？」

お盆にコーヒーを載せて持ってきたコニカが、コウキに問いかける。

失くした左手をかばいながら、湯気の立つカップのひとつを手にとって、コウキは言った。

「別に大したものじゃない。少しだけ、思いついたことを書いておいただけさ」

息を吹きかけて冷ましながら、やけどしないように少しずつすする。砂糖もミルクも入れずに飲むのが、コウキのこだわりでもあった。

「また入れ方が上手くなったんじゃないか？」

「そうですね？ それはどうも、ありがとうございます」

そっけない言い方とは裏腹に、実にうれしそうな笑みを浮かべた。そのまま台所へ戻るコニカを確認し、コウキは再び書き物へと戻った。

『今回、自分のしたことが人類にとってプラスになるのかどうかは、

正直なところ不安だ。いやむしろ、マイナスになる可能性の方が、ひよっとすると高いのではないか？

だが、個人的には自分の行動には満足している。

自分の行動に嘘についてはいない、それだけは間違いなく確かなのだから』

部屋の奥からは、コニカとナミの仲の良い話し声が聞こえてくる。それを聞いてほほ笑むと、コウキはペンを置いて、窓から空を見上げた。

見上げる空は、どこまでも澄んで青い。たとえ望んでいようともいなくとも、明日という名のその空だけは、生ある限り万人に、平等にやってくるのだ。

## エピソード（後書き）

ここまでお読みくださいませ、誠にありがとうございました。貴重なお時間を拙作に割いていただきまして、本当にありがとうございます。

とりあえず完結したのですが、今の心境としましては『反省はしている、でも後悔はしていない』といったところでしょうか？

反省点は、数え上げればきりが無いほど、それこそ山のようにあります。序盤の構成に比べ、時間的にしんどくなってきた後半とは、明らかに違いがわかってしまいます。さらに、本来ならば少しずつ世界観を明らかにしていく予定だったのが、文章の都合上、後から付け足したように見えてしまうなど、ストーリー上悲惨なものもあります。

そして一番の反省点がここ。せっかくの敵役が、最終話だけの出たとこ勝負になってしまった点です。これだけは、反省してもしきれません。いろいろと裏設定もつくつたのに、生かしきれず……。

ただ、今回の作品で得ることができたものもたくさんあります。たとえば、反省点で述べましたが、世界観設定を小出しにしていくことなど、初の試みですが、なんとなく手ごたえをつかめたような印象があります。

さて、みなさんはもうご存じでしょうが、この作品は天崎剣さま主催のSF企画『空想科学祭2009』<sup>1</sup> 出展作品です。このような貴重な機会を設けていただいた天崎さまに、今一度、厚く御礼申し上げます。

またこのような機会があれば、今度は万全を期した状態で、参加したいと思えます。

それでは、稚拙な文章で申し訳ありませんが、これにて後書きとさせていただきます。失礼しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1768i/>

---

闇からの咆哮

2010年10月8日15時42分発行